

# 「てんたかく」の栽培ごよみ

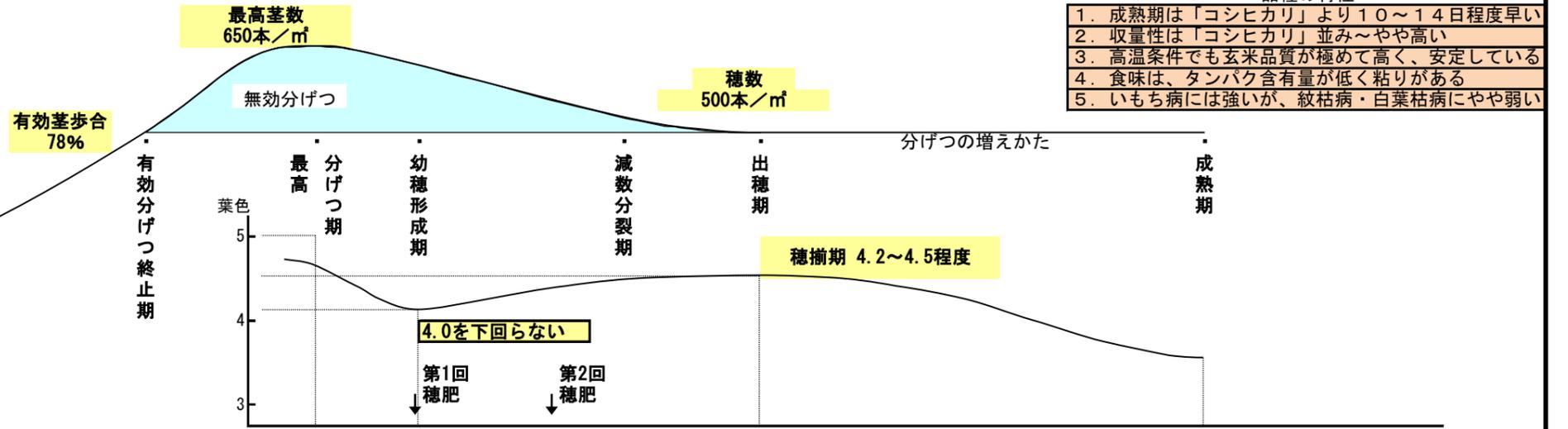
## 収量構成の目安

収量構成	目安
㎡当たり最高茎数 (本)	650
有効茎歩合 (%)	78
㎡当たり穂数 (本)	500
平均一穂粒数 (粒)	60
㎡当たり着粒数 (百粒)	300
登熟歩合 (%)	85
玄米千粒重 (g)	23.5

## 田植え1か月後の目標茎数

植付株数	本数 (本/株)
70株	18本程度

植付本数 3~4本/株



- 品種の特性
1. 成熟期は「コシヒカリ」より10~14日程度早い
  2. 収量性は「コシヒカリ」並み~やや高い
  3. 高温条件でも玄米品質が極めて高く、安定している
  4. 食味は、タンパク含有量が低く粘りがある
  5. いもち病には強いが、紋枯病・白葉枯病にやや弱い

月日	4月	5月	6月	7月	8月	9月			
草刈時期	★ ←本田防除以降、収穫までは草刈りをしない→ ★								
生育区分	育苗期	活着期	有効分げつ期	無効分げつ期	幼穂形成期	穂ばらみ期	出穂期	登熟期	収穫期
水管理	やや深水	浅水管理 軽めの田干し	中干しの徹底 除草剤散布時は深水を保つ	間断かん水	幼穂形成期以降は飽水管理 (足跡の水が切れないように管理)	出穂から20日間は湛水状態を保つ	落水を急がない		
栽培管理のポイント	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 稲わらの腐熟を促進するため、秋起こしを行い、排水溝を設置する</li> <li>・ 土づくり肥料はそれぞれの基準量を確実に施用する</li> <li>・ 過乾燥による胴割米を発生させない</li> <li>・ 仕上水分 14.5 ~ 15.0 %</li> <li>・ 適期内に刈取り、刈り遅れのないように注意する</li> <li>・ 籾の黄化率 85 ~ 90 %程度が刈取り適期</li> <li>・ 収穫前に必ずクサネムやヒエなどの雑草を抜き取る</li> <li>・ フェーン時はかん水して、葉身の萎れを防ぐ</li> <li>・ 刈取り予定日の5 ~ 7日前まで間断かん水する</li> <li>・ 圃場全体に水が行きわたっているか確認する</li> <li>・ 湛水期間はこまめに水を入れ、田水温の上昇を防ぐ</li> <li>・ 出穂から20日間は湛水状態を保つ</li> <li>・ <b>本田防除の徹底 (適期防除の実施)</b></li> <li>・ 2回目穂肥は1回目の10日後に確実にを行う</li> <li>・ <b>分施肥系の場合</b></li> <li>・ 畦畔草刈りでカメムシ密度を下げる</li> <li>・ 1回目穂肥は幼穂長 1 mm を確認してから行う</li> <li>・ <b>分施肥系の場合</b></li> <li>・ 幼穂形成期の葉色は 4.0 を下回らないようにする</li> <li>・ 中干し後は間断かん水をくり返し土壌を固くする</li> <li>・ 幼穂形成期以降は飽水管理 (足跡に水が切れないように管理する)</li> <li>・ 中干しは (田植え後4週間を目安に開始する)</li> <li>・ 適正な中干しにより、根の活力を高めるとともに過剰分げつを抑制する</li> <li>・ 除草剤散布は適期に行い、散布後5日間は湛水状態を保つ</li> <li>・ 田植後4週間までに溝掘りを行い、水のかん排水の効率化を図る</li> <li>・ 良質の茎を早く確保する</li> <li>・ 全層施肥の場合は早期追肥を田植え後7日以内に施用する</li> <li>・ 活着後は浅水管理とし、分げつの発生を促す</li> <li>・ 田植後3日間はやや深水として活着を早める</li> <li>・ 一株の植付け本数は 3 ~ 4本とし、3cm程度の深さに植える</li> <li>・ 田植機の株数設定は 70 株/坪 に設定して作業を行う</li> <li>・ 育苗薬剤は育苗ハウスの外で散布する</li> <li>・ 病害虫予防のため育苗薬剤を行う</li> <li>・ 基肥量は地区基準量を守る</li> <li>・ 天候に合わせた温度管理を確実にを行う</li> <li>・ 播種量は乾籾で一箱当たり 120 g以下としてよい苗を作る</li> <li>・ 田面の均平をよくする</li> <li>・ ゆっくりと耕起し、作土 15 cm 以上を確保する</li> <li>・ <b>土づくり資材の散布</b></li> </ul>								